
Whatever are you reading ?

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Whatever are you reading ?

【Nコード】

N0756N

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

東方香霖堂後、霖之助のところへ本を読みに来るようになった朱鷺子（名無しの本読み妖怪）が店主・森近霖之助への乙女な気持ちをほぼ全開のSSになります。朱鷺子が霖之助への片思いでやりきれなくなるお話です。短いです。

(前書き)

朱鷺子×霖之助で朱鷺子の片思いなSSとなっております。CP要素が苦手な方にはあまりお勧めできません。その点を踏まえたうえでどうぞ。

Whatever are you reading ?

「ねー、店主ー。」

本を読みながら、突然その妖怪少女は口を開いた。

「店主はあたしと本どっちが大事？」

その突発的質問に、うまく返す話術など店主こと霖之助は持ち合わせてなかった訳で。

「ねー、どっちが大事なの？」

いつのまにかその妖怪少女、名無しの本読み妖怪・朱鷺子は霖之助の向かい側へと腰掛けていた。

カウンターにひじをつき、手を組み、その上にあごをのせて、じっと霖之助を見据える。

その目が質問の答えを催促していたことは、誰の目にも明らかであった。

朱鷺子の表情は真剣であり、まじめそのものといった感じ。

その表情に、少なからず焦る霖之助。

正確には、あまりに突然な事態に混乱しているのだが。

「……いや、ちょっと待ってくれ」

なんとか頭の中を整理しようと霖之助は言葉をひねり出そうとする。なんだこれ、どうしてこうなった。

過去になにかこの問いにつながる何かがあったのだろうか、霖之助は少し過去の記憶を呼び起こし、手がかりを探すことにした…。

そもそも、朱鷺子がここ、香霖堂に来るようになったのはそんなに過去のことではない。

妖怪の時間感覚でいうと、むしろ最近に分類されるのかもしれないくらいだ。もっとも、人間からすると少し過去なのかもしれないが。

霊夢が朱鷺子の本を強奪し、それを取り返しにきた朱鷺子が魔理沙にコテンパンにされてから、少し後。

朱鷺子が再び、香霖堂を訪れたのだった。

そこで彼女は、奪われた本に関しては（朱鷺子談・非常に憤るところではあるが）引き下がるとし、その代わりといっちは難だが。店にある本を読ませて欲しい、と頼んできた。

恐らく、魔理沙にコテンパンにされた際に、ちらりとこの店にずらりと並ぶ本を目にしたのだろう。痛い目にあったからこそ、逆に印象に残ったのかもしれない。

店の本を読むのはかまわなかったが、なぜか快諾できずにいる霖之助を見て朱鷺子はさらに譲歩し。自分が住む魔法の森周辺で見つけた本を、この店へ運んで置いてもいい。その代わりこの店で好きなだけ本を読ませてくれと言った。

それならこちらに損害はなく、むしろ仕入れる本の種類が増えるかもしれない。と、霖之助は朱鷺子の提案をのんだのだった。

それからというもの、朱鷺子は香霖堂でほぼ毎日本を読みふけていた。

朱鷺子は一週間に一度くらいは魔法の森で拾ってきた本を持ってきたし、無縁塚へ一緒に商品の仕入れ（朱鷺子は本探し）に行くこともしょっちゅうであった。

そんな調子で朱鷺子はいつも店にいるので、たまに来る客の中には驚くのも居た。なぜだか知らないが。

……魔理沙や霊夢が来るときは、逆に朱鷺子が驚くのだが。

だが最近では朱鷺子も対黒白魔法使い&紅白巫女への耐性を獲得したようで、二人が来ても落ち着いてることが多くなった。二人の

方も、特に朱鷺子を退治しようとは思わないらしかった。
そうして、現在に至る……。

だめだ、さっぱりわからん。

霖之助は自分の記憶遡行能力にささか失望しつつ、朱鷺子に向
き直った。

「……」

霖之助が自分の記憶を掘り起こしてる間、朱鷺子は暇だったのか、
カウンターに突っ伏して。少し前に霖之助が読んでいた、今はカウ
ンターの上に寝かせてある本の背表紙をつついていた。

「……」

なにか言葉をかけなくなる姿だったが、なにも言葉が見つからな
かった。

「ねー……」

朱鷺子が再び口を開いた。なんとなく身構えてしまう霖之助。

「この本、何の本？」

「………は？」

再び予想外の質問であった。思わず間拔けな声を出してしまう。
その反応に、朱鷺子はもう一度質問を繰り返した。心なしか、少
し頬を膨らませながら。

「だから、この本、何の本？」

「あ…ああ、その本は——」

霖之助は本の説明をしながら、府に落ちない感覚を味わっていた。
どうしたんだ、今日の朱鷺子は。

本の内容に関して説明を求めることは珍しくはないが、いつもは
霖之助の説明を熱心に聞くのに、今はまったく聞いてないようだっ
た。霖之助も本も見ず、どこかを眺めている。

本当にどうしたんだ、今日の朱鷺子は。

ひよっとすると、具合でも悪いのかもしれない。と心配したりする霖之助であったが。さっぱり訳がわからないのは変わらなかった。

……

……

：

店主が、熱心に本の説明をしている。

その説明を聞く限り、その本は外の世界での学問の心得とやらについて書いてあるらしい。なかなか為になることが書いてあるそうだった。

あたしは、その説明をひたすら聞き流していた。

——ちよっと読みたい気もするのだけど。

店主の説明は、いつもあたしにその本を読む気にさせる。

店主の楽しみは、いつもあたしの楽しみ。

店主の悩みは、いつもあたしの悩み。

店主の言葉は、いつだってあたしの心に刺さる。

店主の読んだ本は、いつもあたしの読んだ本になる。

——いつからそうなったのだろう。わからないけど、いつからか、そうなった。

はじめは、ただ本が読みたかった。

あの店にならんだ、きれいに、たくさんならんだ本が読みたくて読みたくて。

あんなにたくさんの本が読めることになった日には、うれしくて死んでもいい気分だったのを覚えてる。

店で本を読みふける。朝から晩まで。

時にはあまりに夢中になって、徹夜することもしばしばだった。

店主と二人そろって本を読みながら寝てしまうこともあった。

店の仕入れも手伝うし、もってくると約束した本もちゃんと魔法の森から探してくる。

たまに黒白や紅白が店に来るのがいやだったけど、いまではあんまり気にしなくなった。機嫌が悪そうなときは怖いけど。そんなに悪いやつじゃないとまで思うようになった。

後で聞いた話だと、店主が気を利かせて。黒白と紅白があたしを退治しないよう釘をさしておいてくれたらしい。

おかげであたしは、何も気にせず本を読みふけることができた。でも——、でも、いつからだろう。ここに来るのが、ここに来る目的が、いつの間にか変わっていたのは。

ここが、ただ本を読みに来る場所でなくなったのは。

それに気が付いたとき。まだあたしはこの変化がどういうことなのか、よくわかってなかった。

でも少し前、店主に薦められた本を読んだとき。心でもややもやしていたものが晴れた気がした。

その本は店主いわく「恋愛小説」と呼ばれる種類のものらしかった。朱鷺子は女の子だから好きかもしれないな、と店主が言っていたのを覚えてる。

その中に登場する少女が、とある青年に抱く気持ち。それが恐ろしく自分のと似ていた。

そうしてはつきり自覚した。

この本いわく、あたしは、店主に『恋』をしている。本よりも、何よりも、店主が好きになっている、と。気づいてしまったのが、昨日の話。

——だからちよつと、確認したかったのだ。

店主の方は、どうなのか。

あたしは本よりも好きになってしまった店主は。あたしを本よりも好きなのだろうか？

そんな訳はない、本のほうが好きだって言うに決まってる。
わかってるけど、質問したのだ。
でも、返ってきた答えは――。

「はあ……」

あまりに静かな店内に、少女のため息がむなしく響いた。
霖之助の耳にも、本日何度目かわからないその音が入ってきた。

「……朱鷺子、本当にどうしたんだ今日は」

朱鷺子はいつまでも霖之助の向かいでカウンターに突っ伏したままだった。そこで突っ伏したまま居られると、本を読むのに多少邪魔なのだが、なんとなくどけとも言えず困っていた。

その朱鷺子は、声をかけた霖之助に突っ伏したまま恨めしそうな目を向けた。とはいえ、心底恨むような表情ではなく、どこか力のこもっていないがなんとなく感じる程度なのだが。

「どこか具合が悪いのかい？妖怪の病気は精神にくるからね、厄介なことにならない内に、永遠亭とかで見てもらったほうがいいんじゃないかい？」

もったも、あそこで治療を受けて生きて帰れるかはどうかは知らないが。といういらぬ注射をなんとか飲み込んで霖之助は言った。
すると朱鷺子はなぜか、ふふっ、と微笑んだ。

そして突っ伏していた上体を起こし、背伸びのような仕草をする。
そこで、何かつぶやいた。

「店主は、ずるい」

微笑を浮かべながら、朱鷺子は言った。

「ずるいや、店主はやっぱりずるいよ」

何度も、朱鷺子はそうつぶやいた。

霖之助には、何のことだかさっぱりだったのだが。

霖之助が「なんのことだい？」と聞いても、朱鷺子は「いーの、こっちのはなし」とかわすだけだった。

朱鷺子は立ち上がると、軽い足取りで本棚から本を取ってきて、そしてまた戻ってきた。

そして、霖之助に言った。最近朱鷺子が、よく霖之助に言うようになった言葉を。

「この本、何の本？」

――……

……

店主が、気分良く本の内容を説明している。

どうやらお気に入りの本であるらしい、説明に少し熱が入っているのがあたしにはわかった。

やっぱり店主はずるい。

今度は本の説明もしっかり聞きながら、あたしはやはりそう思うのだった。

店主は、あたしと本のどちらが大事か、と聞いたとき。

困ったような顔をしながら何も答えなかった。

そう、答えなかった。

ずるい、と思う。

本が大事だ、と答えれば。まあしょうがないとあたしは思っただろう。

万が一、あたしが大事だ、と答えれば。あたしは包み隠さず店主に気持ちを打ち明けられたろう。

どちらにせよ、少しは心のもやもやが取り除けたはず。

でも店主はそうさせなかった。

ずるい。ずるいずるい、ずるいずるいずるい。

なんてはつきりしない奴なんだろう、なんてあたしをなやませる奴なんだろう。

でも、そう。それがいいの。

あたしは好きなんだもの。それで、いいの。

それが、好きなの。

そうして暮れてくあたしと店主の一日。

それも好きなんだもの。

だからきつと、これでいいの。

でもいつかは。

店主をあたしと同じにしてあげるわ。

いいえ、そうしてみせる。

………

……

…

幻想郷のとある古道具屋の一日は、今日も平和に暮れていく。
恋する妖怪少女をのせて。鈍感店主と共に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0756n/>

Whatever are you reading ?

2010年10月9日03時19分発行